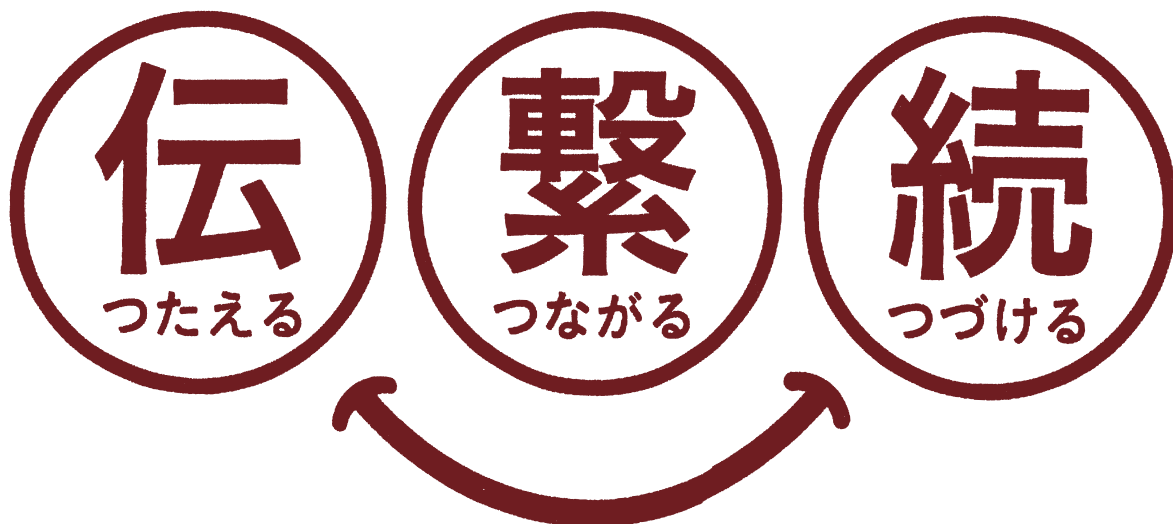


MIYAGI×NAGANO×HYOGO×OKAYAMA×KUMAMOTO

2020



2020 年度

学生災害ボランティア・ネットワーク事業
報告書

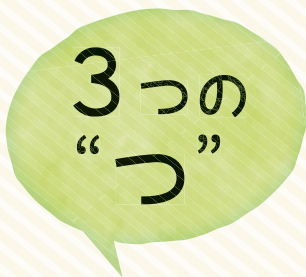
VOLUNTEER REPORT

2020 2021
NOV ▶ MAR

神戸市社会福祉協議会・日本財団学生ボランティアセンター
大学コンソーシアムひょうご神戸

2020年度 学生災害ボランティア・ネットワーク事業

神戸市社会福祉協議会・日本財団学生ボランティアセンター
大学コンソーシアムひょうご神戸



- つたえる … 震災の経験と教訓を、現地の現状を
- つながる … 現地の住民、学生と
- つづける … 現地での活動をこれからも



私たちのボランティア活動は、今年で10年目となりました。
活動当初から掲げてきた活動のコンセプトが、「つたえる・つながる・つづける」の「3つの“つ”」です。
尚綱学院大学の学生ボランティアとの活動を通じて受け継がれてきました。
コロナ禍であっても、自分達ができることを考えこれからも、この活動に参加する学生たちによって受け継がれていきます。

長野

岡山

VOLUNTEER REPORT

2020 2021
NOV ▶ MAR

MIYAGI×NAGANO×HYOGO×OKAYAMA×KUMAMOTO

宮城

熊本

CONTENTS

	(ページ)
ごあいさつ	02
活動の概要 & 活動プログラム	04
宮城県名取市関上での活動	11
長野県長野市赤沼での活動	12
岡山県小田郡矢掛町での活動	13
熊本県人吉市・兵庫県三木市での活動	14
大学コンソーシアムひょうご神戸、 災害ボランティア活動、10年の歩み	15
お世話になった方々・スタッフからのコメント	16
学生スタッフ紹介	18
学生災害ボランティア・ネットワーク事業参加者	19

ごあいさつ

大学コンソーシアムひょうご神戸
学生交流委員会 委員長代理
神戸親和女子大学
地域連携センター長
教授

大島 剛



東日本大震災から10年が経過する節目の年に、新たな変革を余儀なくされる事態が訪れました。世界を席卷する新型コロナ感染症の問題は、私たちの生活様式を一変させるものとなっています。

私たちは東日本大震災が起こった年から、学生を集めて宮城県名取市にボランティアバスを出し、熊本地震が起こった時に熊本県益城町に、西日本豪雨があった時に岡山県真備町にと、学生ボランティアの活動拠点を順次増やし、今年度は台風による豪雨災害のあった長野県長野市を新たに増やし、計4か所の被災地に支援を広げてきています。

10年の時を経た宮城、地震と水害が重なった熊本、少しずつ復興しかけている岡山、まだ時が経っていない長野と、それぞれに適するボランティア支援の内容が異なり、何をすべきか何ができるかに学生ともども考えている矢先に、世界を揺るがすコロナ禍が起こって、もっと大きな変更が必要となりました。

そこで今年度はこの事業も新たなフェーズに突入しました。リモートを駆使した現地の方々との交流という新たな手法で、現地入りのできない現状での活動の模索が続いています。ニューノーマルという時代にマッチしたボランティアのあり方が試される時代となってきました。思ったようにはうまくいかないこともあるのですが、バージョンアップしたこの活動にこれからも期待したいと思います。

本活動に大変な中ご協力いただいた現地の被災された方々、そしてそれを支える関係者の方々にお礼を申し上げます。また、今年度の事業に携わった学生、関係機関のスタッフの方々にもねぎらいの言葉をかけさせていただきます。お疲れ様でした。これからもよろしくお願いいたします。

神戸市社会福祉協議会
地域支援部長



禰宜田 竜樹

「2020年度 学生災害ボランティア・ネットワーク事業」に参加されたみなさん、約6か月間にわたる長い期間大変お疲れさまでした。

例年と異なり、現地へ赴いて直接顔を合わせて対話することが難しい状況の中、コロナ禍においてどのような災害支援活動ができるのか悩み、考え、それぞれのチームが思い思いのカタチを作っていくかたように思います。コロナ禍は人と人とのつながりを奪いましたが、一方で新しいカタチでつながれることを発見する機会でもあります。実際にみなさんは、オンラインの画面を通して多くの人々との新たな出会いがあったり、新たな気づきがあったと思います。従来のやり方にとらわれず、何が必要か、何が求められているのか自由な発想で、ぜひこれからも様々な活動に取り組んでいただきたいと思います。

今年の活動を通してみなさんに知っていただきたいことは“現地に行くことだけが被災地支援ではない”、“遠く離れた場所からも被災地支援はできる”ということです。特産品を購入して被災した生産者を応援することや、災害支援募金に協力する、災害について学び自分の身近な人へ伝えていくことなど、被災地やそこで暮らす人々への大切な支援であると感じてもらえたと思います。

これは被災地支援に限ったことではなく、みなさんの身近な地域で起きている様々な課題に目を向け、みなさんが関わりやすいスタイルで、“我がごと”として取り組んでいただけることを期待しています。

最後に、大学コンソーシアムひょうご神戸をはじめとする共催団体ならびに本事業にご協力いただいた被災地・関係団体の方々にあらためて感謝申し上げますとともに、被災地の着実な復興をお祈り申し上げます。

日本財団学生ボランティアセンター
(Gakuvo)
常務理事

澤田 佳彦



本事業に参画された学生ボランティアの皆様、ご尽力いただいた共催各社をはじめ関係者の皆様に心よりお礼を申し上げます。ありがとうございました。

Gakuvoは東京にあるため、昨年度までは職員が兵庫県や活動地に赴いて、みなさんと時と場所を共有してきました。今年度はコロナ禍のなか、現地での活動が叶わないばかりか、研修やミーティングなどもオンラインが中心となりました。遠くの方とも気軽に頻繁にやり取りできるという良い面もあったかもしれません。ただし、やはり仲間とも、活動地の方々とも、直接会ってコミュニケーションする、五感で地域を感じたかったのではないのでしょうか。今年度から活動に参画した学生ボランティアのみなさんには特に強い悔しさが胸に刻まれたかもしれません。ただ、応募からこれまでに至るまで、この状況において、何がしかの活動がしたいとモチベーションを持続させられたのは、とても素晴らしいことです。直接集まるのが困難な状況であった2020年度は糧になるでしょう。

災害などによりボランティアが必要な事態は必ず起きます。その時に学生ではなくとも、ボランティアという形では無いにせよ、この事業に参画した経験が生きてきます。そして、急な事象が無くとも、社会をよりよくするためには、さまざまなテーマ・段階でのボランティアが必要です。学生のみなさんが、今後もそれぞれの持ち場で社会を良くするために動いていかれることを期待しています。

学生スタッフ代表
神戸松蔭女子学院大学
人間科学部 食物栄養学科4年生

田渕 日和



みなさんはこの一年どのように過ごしたでしょうか。日常が大きく一変し、先の見えない不安な日々が続きましたね。当たり前に過ごしてきた日々の大切さに改めて気づいた方も多いのではないのでしょうか。

10年目を迎えた私たちの活動もまた、大きく変化をさせなければなりません。被災地を訪れ、現地の様子を自分の目で見て、伝えることを大切にしてきた私たちにとって、現地に行けないことは、大きな衝撃でした。

この現実には、私たちは、学生ボランティアとして何ができるのか、悩み、考え、ときには立ち止まり、それでも決して諦めず答えのない課題に向き合い続けました。そして、各チームが、今できることを考え、実行し、様々な形で被災地の方々との繋がることができました。

今年度の活動を振り返ると、先輩方から受け継がれたコンセプトの中にある、“つながる”について改めて深く考え、ボランティアの本質に向きあえたと感じています。

学生たちが、現実と向き合い考え抜いた、今、私たちにできることがこの本誌にはたくさん詰まっています。私たちの葛藤と学びそして、被災地の方々の想いをこの本誌を通じて感じてもらえれば幸いです。

最後になりましたが、本活動を支えてくださった多くの方々、私たちを受け入れてくださいました現地の皆様。この場をお借りして、お礼申し上げます。ありがとうございました。

活動の概要

2020年度活動趣旨

『現地関係者とコロナ禍でのボランティアについて考えよう!』

阪神・淡路大震災を経験した兵庫県の学生として、日常的な地域福祉や社会支援、災害支援が連続性を持っていることを学び、このコロナ禍におけるボランティア活動について、近年の被災地域（宮城県、熊本県、岡山県、長野県）の関係者と考え、実践します。兵庫県の学生が中心となり、被災地をはじめとする各地とのネットワークづくりを目指すこの活動を通して、「自発性をもち、社会的ニーズに対して活動する」というボランティアの原点に立ち、自ら課題を見つけ、協働していくことを学び、被災地支援・復興支援や今後の災害に備える力を養います。

共催

神戸市社会福祉協議会
日本財団学生ボランティアセンター
大学コンソーシアムひょうご神戸

実施日

2020年11月8日(日)～2021年3月29日(月)

現地活動日程

宮城県名取市関上 3月7日、9日、28日
長野県長野市赤沼 2月23日
岡山県小田郡矢掛町 3月1日、16日
熊本県人吉市 2月23日、3月2日、16日、29日
兵庫県三木市 3月25日、26日、29日

参加学生

学生14名 学生スタッフ8名 計22名

学生スタッフ研修

学生スタッフ研修(オンライン)

日時: 5月28日(木)、5月29日(金)
6月11日(木)、7月23日(木)
9月8日(火)、10月27日(火)

学生災害ボランティア・ネットワーク事業 OB・OG意見交流会

日時: 8月10日(月) 19時00分～21時00分
内容: 過去に学生災害ボランティア・ネットワーク事業に参加した先輩との交流会を行いました。先輩の経験談を交えたアドバイスを聞きながら、今年度の学生スタッフが何をやりたいのか、何ができるのかを考

える場となりました。また、先輩方から、当事業において主体的に動き事業をやり遂げた体験がそれぞれの社会人生活で役に立っていること、卒業した今でも被災地と連絡を取り合っていることの報告がありました。

(プログラム)

- ・OB・OGの自己紹介
- ・教えて!学スタ諸君!!!
- ・教えて!OB・OG!!!
- ・今までしてきたこと～「3つのつ」にのせて～
“つたえる” “つながら” “つづける” の各視点から
- ・まとめ
- ・後輩に一言

講師: 小畑 保奈美(神戸親和女子大学OG)
清水 凜風(神戸常盤大学OG)
森安 裕也(甲南大学OB)

大学間連携オンライン合同ボランティア活動 学習会2020

被災地への支援のあり方を考える ～コロナ禍でわたしたちができることは～

日時: 8月29日(土)、30日(日)

目的: 新型コロナウイルス感染拡大によって例年通りの活動ができない今、何ができるかを全国の大学生と合同で行う意見交換を通して考え、また、過去の災害を学び直し、現在の被災地の状況や課題考える。

内容: (第1日目) [テーマ] 過去と現在の震災を学ぶ

アイスブレイク: 甲南大学 3年 美馬 直

神戸女子大学 3年 三鍋 祐奈

活動紹介: ・宮城県名取市関上バーチャルツアー紹介
尚綱学院大学 4年 下山 陽子

・大学コンソーシアムひょうご神戸活動紹介

神戸女子大学 3年 中野 実菜

阪神淡路大震災について(講話): 「私たちの被災地支援とは～
阪神、その後の災害から～」

(講師) 公益社団法人兵庫県専修学校

各種学校連合会 事務局長

鬼本 英太郎

学生意見交換会①: 「講話を聞いて感じたこと・考えたこと」

頌栄短期大学 2年 森本 彩乃

(第2日目) [テーマ] 私たちにできることを考える
開会の挨拶: 頌栄短期大学 2年 森本 彩乃

アイスブレイク: 神戸女子大学 2年 茶谷 まりん
学生間交流: 「新聞記事から学ぶ災害と防災」

甲南大学 2年 松木 温寛

活動紹介: 「学生スタッフの経験談を聞こう!!!」

尚綱学院大学 4年 逸見 彩絵

神戸女子大学 3年 中野 実菜

学生意見交換会②: 「これからの災害に向けて、私たちができることは…」

神戸常盤大学 3年 中村 華菜

まとめ: 神戸女子大学 教授 大西 雅裕

閉会の挨拶: 尚綱学院大学 連携交流課 佐々木 未央
尚綱学院大学 2年 加賀 佑香

総司会進行: 神戸松蔭女子学院大学 4年 田淵 日和

参加学生の声（一部抜粋）：

（1年女子） 今回学んだことを周りの人に少しでも多く話し、ここで学んだことがイベント内で終わるのではなく、派生しつながっていくようにしたいと思います。

（4年女子） 今回は新型の感染症により世界が変わっているが、災害も同じことだと考えた。今生きている人たちが、強制的ではあるが日常生活を奪われた。でも強制的に奪われたからこそ気づけたこともたくさんあったはず。つまり私たち生きている人全員被災経験をしたのだと言っても過言ではないと、私は感じている。その気づいて感じたことを全員で真剣に議論する。これが復興への道に繋がるし、今後災害が起こっても生きていく力になる。以上が学んだことと生かしたいことである。

参加者募集

大学間連携オンライン合同ボランティア活動・学習会2020
被災地への支援のあり方を考える
～コロナ禍でもできることは～

新型コロナウイルス感染症によって、得意先の連絡ができない、私たちに提供できないものや、全国の大学生を合同で行う難易度が高い。過去の災害を学び直し、今以上に被災地の状況やニーズを学ぶ機会を設けたい。

開催日時：2020年8月29日(土)30日(日) 13時～16時 参加費無料
受講対象：ボランティア活動に興味のある大学生
定員：20名（定員を超える場合は抽選となります）
開催方法：WEB会議システムZOOM（オンライン）

<p>8/29(1日目)</p> <p>【テーマ】被災地と現在の震災を学ぶ</p> <p>① 各団体の活動紹介 ② 被災地を支援する「バーチャルツアー」 ③ 最新被災地実況について(講師) ④ グループディスカッション などを予定</p>	<p>8/30(2日目)</p> <p>【テーマ】私たちにできることを考える</p> <p>① ディスカッション ② 被災地の現場から災害を学ぶ ③ グループディスカッション などを予定</p>
---	---

※ボランティア未経験の方でも参加できるプログラムになっています。
※本学所属以外の方も参加、学びたい学生が参加することができます。

【お申し込み方法】
大学コンソーシアムひょうご神戸のホームページから、お申し込みフォームを提出してください。お申し込みは、お申し込みフォームから申し込みをお願いします。お申し込みは、お申し込みフォームから申し込みをお願いします。
8月26日(日)締切

【主催】
高校学生大学(宮城県)、大学コンソーシアムひょうご神戸 学生交流委員会
お問い合わせ先：大学コンソーシアムひょうご神戸事務局 078-271-0033
兵庫県立大学 ボランティアセンター 078-281-3664



活動プログラム

オリエンテーション・第1回研修会

日時：11月8日(日)13時00分～17時00分
場所：兵庫国際交流会館 3階 多目的ホール
内容：

1. オリエンテーション・スタッフ紹介

- (1) 主催者挨拶
 - ・大学コンソーシアムひょうご神戸 学生交流委員会
委員長代理 神戸親和女子大学 地域連携センター長
大島 剛
- (2) スタッフ紹介
 - 学生スタッフ 神戸松蔭女子学院大学
4年 田淵 日和
- (3) 学生災害ボランティア・ネットワーク事業について
 - 大学コンソーシアムひょうご神戸
学生交流委員会 ボランティア事業事務局
甲南大学 地域連携センター事務局
課長 松下 賢一

2. 第1回研修会

- (1) 「学生スタッフ企画研修」
学生スタッフ
- (2) 「だいじょうぶ」～ところであなたは、なにができますか？
(講師) 三田市野外活動センター 所長 森本 崇資
- (3) 「今後の活動について」
大学コンソーシアムひょうご神戸 学生交流委員会
神戸親和女子大学 教授 大島 剛
神戸女子大学 教授 大西 雅裕

Voice

「この研修で、学生は何を学び、何を感じたか？」
～ボランティア活動をする前に～

【学生スタッフ】 森本さんは「ボランティア」を「できるときに、できる人が、できることする」という言葉に言い換えられていた。この言葉を聞いてボランティアは強制的なものではないことを改めて感じ、ボランティアの意味や向き合う姿勢を考えることができた。日常の中で困っている人に気づくこと、日々周りを見ることができているので現地の方との関わりも変わらと思った。視野を広げて日常生活を送っていると、様々な発見や出会いをする。「気づく」ということはとても良いことである。さらに、自分はどのようなことができるのかを考え、行動することで相手を思いやり動くことができると考える。

今回の研修会を通して、心に響く新しい言葉を多く知ることができた。これからの私にとって大切な言葉になると思う。今からできること、日々の生活の中で気づきを見つけることや人とコミュニケーションを取るときに相手に伝わるように言葉を考えることはこれからすぐにやっていきたい。

【参加学生】 「被災地で自分たちも被災者になるのか」という問いにはそんなことにはならないと断言することができなかった自分に対して、無意識のうちに自分の生活の中では地震などは起こらないというような、被災地と自分の街とを別のものとして考え他人事としてしまっていたのではないかと感じてしまった。自分の意思を持って、自分がどうすれば良いのかを考え、自分の命は自分で守るため、まずは考えて主体的に動くことを身につけられるようになりたいと思った。私は第一回目の研修を通じて、自分が被災地の方と交流する上での目標や、自分のしたいことを明確化し、これからの研修へどう向き合えば良いかということを考えさせられた良い機会となった。次回からは、自分で立てた大きな目標に向かっていけるようその日々の目標を立て、達成していきたいと思う。

「研修を終えて～学生に伝えたかった事～」

(講師) 三田市野外活動センター 所長 森本 崇資

大学コンソーシアムひょうご神戸のみなさん、おひさしぶり。皆さんとの時間は、またひとつ僕の人生の経験となりました。今日は12月12日。みんなに出会った11月8日からひと月とちょっと経ちました。もしかしてその間に、みんなの毎日に「3D」が芽を出したりしてますか？

もりもっさんは、この1か月の間にもこれまた子どもからお年寄りまで、新聞やテレビまでいろんな人とかかわりを持ちました。大事なこと、伝えたいことは、まったく変わってないよ。

みんなでちゃんとした人間になろう。「言葉」「火」「道具」を使える「人間」に。そして、「だじょうぶ」を周りにも自分にも言える人間に。

みんなは「被災地の方々のために」と思って活動しているかもしれないけど、被災した場所で生きている人は、はっきり言うて「みんなよつよい」と思います。みんなよつよい人に。みんながなにかしてあげる???ちょっと変やよね。でも、みんなはその中で、何かできることを探して、役に立ちたい。と思っている。

「できるときに できるひとが できることをする」

「私はこれをしてあげたい」「私はこういうスキルがある」ではなく、その場その場をしっかりと観察して、アンテナを立てて自分の言動・行動を大切にしてほしいと思う。

ネットがあれば生きていける世の中になったように錯覚するけど、みんながやろうとしている「人と人のつながり・助け合い」を目指すなら、それは、「温度のある経験」のみが役に立ちます。そして体に残ります。失敗して、体も心も冷えてしまうこともあると思う。うまくいってるときは、なにをしても元気になると思う。みんな、思ってるほどわかってないと思うけど、長い人生の中で、「大学コンソーシアムひょうご神戸のメンバー」との時間ってというのは、ものすごく短いよ。でも、せっかくのつながりなんだから、思いっきりエネルギーを費やしてください。幼稚園児ですら「損得を考えるような世の中」になってしまっているけど、みんなは時には損得勘定抜きで、やってみてください。

そして最後に大切なこと。本当に辛いことがあったら、逃げることも忘れないで。逃げることも、ズルいこと。それは生きていく上でとてもたいせつなことだから。

もりもっさんより



第2回研修会

日時：11月14日(土)13時00分～16時00分

場所：兵庫国際交流会館 3階 多目的ホール

内容：チーム毎によるグループワーク

(担当) 神戸女子大学 教授 大西 雅裕
神戸親和女子大学 教授 大島 剛

- (1) アイスブレイク・グループワーク説明
- (2) グループワーク・まとめ
- (3) 特別研修

テーマ

「宮城県名取市の現状と尚絅学院大学チーム TASKI の活動について」



Voice 「この研修で、学生は何を学び、何を感じたか？」
～自分を知り、仲間を知る～

【学生スタッフ】 去年は現地に行くことができたので現地の状況を肌で感じることはできたが、今年は去年のようなことができない可能性もあるのかなと思っていたが you tube を活用するなど現代に合った形で活動を続けていることを知り自分たちにもできることはたくさんあると考えることができた。一番印書に残ったことは手紙で住民の方とコミュニケーションを取り続けているということだ。すごくアナログなようにも聞こえるが筆跡などが生み出す温かさは何にも代えがたい強いつながりを生むことがあるかもしれない

【参加学生】 他己紹介では、相手のことを知るための質問をするのが難しさがわかった。あまり話したことのない学生に、どこまで踏み込んでいいのか恐る恐るになり、普通の無難な質問しかできなかったりした。これが現地の住民さんへ被災についての質問になると、もっと何を質問すればよいかかわらないし、できないのではと思った。

第3回研修会

日 時：11月15日(日)9時30分～15時00分

場 所：人と防災未来センター

内 容：(1)人と防災未来センター見学(講話30分・館内展示見学60分)

(2)特別講義

テーマ

講義と議論① 復興と防災

講義と議論② 死と祈り

講義と議論③ 記憶と未来

講師：人と防災未来センター

研究部 主任研究員 高原 耕平氏

場所：人と防災未来センター 東館 6階 大会議室

Voice

「この研修で、学生は何を学び、何を感じたか？」
～なぜ震災を学ぶのか～

【参加学生】 今回のすべての講義から私たちのグループで出した問い「いつまで、私たちはどこまでの内容を継承する必要があるのか」。継承しなければなかったことと同様になってしまうような恐れもあるが、ずっと継承し続けていくことも不可能に近い。いつかリナリエのように本来の目的とかけ離れてしまうかもしれない、と考えた。今回今後の研修を通じて経験していない人が震災や災害をどのように向き合っていけばいいのか、どのように周りに発信していけばいいのかという問いと向き合い、答えがぼんやりでも出てくるように積極的に学んでいきたいと思う。

【参加学生】 直接的な記憶がほとんどない、まったくないが家族からの語りや学校での学習を通して震災を身近な物だと感じている中間世代の人はなんのために誰のために祈っているのだろうという疑問があがった。ボランティア活動を通して3月までに考えられるようにしたいと思う。

「研修を終えて～学生に伝えたかった事～」

(講師) 人と防災未来センター 研究部 主任研究員 高原 耕平 氏

おかえりなさい。こころやことばはおだやかでしょうか。とげとげしたかんじや、肌をかきむしられ剥ぎ取られたような感覚や、お腹や胸の底のものもやはありますか。身体と生活のバランスはくずれていませんか。そういうことが無ければよかったですし、あるのならよかったです。行って帰ってくる、なにかをきちんと聞くことは、そういうことをもたらすことがあります。半拍遅れてぐらっときます。そのために多少よろめいて、しゃがんで、なにかを探しなおしているひとのことばをわたしは大切にかんじます。

ことばが戻ってくるのを待っているとき、ひとは普段とはすこし質のちがう時間を生きているのだとわたしは考えています。文明が課す時間とも自然の摂理が占有する時間ともことなる、人間自身の時間です。災いは人間からことばと時間をこそぎ落とし、強引に押し付けます。災いの跡を訪ねて帰ってくることや、災いを生きのびたひとの話や話を聞くこと。そのよろめきやとまどいを通じて出会いなおすことばがあったならば、それはたとえへだたっていても「被災地」のひととびとが必要とするものであり、とおくからでも共鳴し、いつか支えになるものだとわたしはおもいます。だからいまは、まずあなたがたの話をよくききたいとおもいます。



第4回研修会

日 時：11月22日(日)10時00分～17時00分

(午前の部)

場 所：三宮界限

内 容：震災遺構フィールドワーク(神戸市役所→東遊園地→旧居留置→メリケンパーク)

講 師：神戸防災技術者の会(K-TEC) 倉橋 正己、

片瀬 範雄、仲田 文人、田中 亜矢子

(午後の部)

場 所：ふたば学舎 3階 講堂

内 容：避難所に焦点を当てた防災/減災メニュー、映像スライドによる学習、語り部体験、避難所体験、避難所ワークショップ

講 師：ふたば学舎 コーディネーター 山住 勝利

Voice

「この研修で、学生は何を学び、何を感じたか？」
～震災を知る～

【参加学生】 私たちのチームは神戸市役所の展望デッキに向かった。ただ見ているだけだと綺麗な街並みだなと感じたが、ガイドの仲田さんの話を聞くにつれて少し恐怖心が出てきた。なぜなら、三宮などの街並みは扇状地であるということ、天井川になっている地域があるということ、六甲山の石は風化しているため土砂災害が起こる危険性があるということなどを聞き、安心できいな街だと思っていた私の考えが覆されたからだ。その時私は、このように災害や昔の地域の様子を聞くことは大切なことだと感じた。きれいな状態にある今を避ると、様々な出来事があり、そして多くの人々の支え合いや努力

の結晶がみえてよりその地域のことを知ることができ、災害時の避難にも役立つ。そう考えると、学校で学ぶ社会科の歴史には今を生きる私たちに、非常に重要なカギが隠されているのではないかと考えた。

【参加学生】 災害時にソフト面で被害を少なくするというのを案内してくださった方が説明してくださったことが非常に心に残った。それはメリケンパークの堤防の効果についてのお話であったが、その堤防は比較的多くの高波などには対応できるが、危険な高さの波や地震の際の津波は堤防などのハードな防災ではなく、非難するなどのソフトな防災を前提にこの高さである、ということであった。これは、想定外の規模の災害時には何よりもまず避難が大切であるということを知る上で非常に示唆的であると感じた。

「研修を終えて～学生に伝えなかった事～」

神戸市防災技術者の会 (K-TEC)

(講師) 倉橋 正己

「共に学ぶ」～震災遺構まち歩き、お疲れさま。私は兵庫県内の学生の方々を案内しました。拙い話にもかかわらず、一生懸命メモを取りながらお聞きいただき、真剣さが伝わってきました。これからの世の中を担う学生の方々が、いくらかでも災害に対する関心、心構えをお持ちいただければ我々の役割が果たせたとと言えます。

また、感想文の中にありましたが、道中、救急車のサイレンが聞こえてきたので、「震災直後は1日中あちこちでサイレンの音が聞こえていた」と喋った何気ない話に、当時の雰囲気をよく表していると敏感に反応されたのには、ネタ本の内容を伝えるだけが語り部ではないんだなあ、改めて勉強させていただきました。

今回参加された皆さんの中からお一人でも神戸市役所に就職され、神戸防災技術者の会で一緒に活動できるようになれば大変うれしいのですが…。またお会いしましょう。

(講師) 片瀬 範雄

孫のような若い皆さんが、神戸の震災遺構をスタートに、東日本や熊本の被災地を順次訪ね、多くの人の「命」を守るための「学び」をされている姿に感動しながらガイドをしていました。あれも伝えたい、このことも、地震に留まらず水害も、いや神戸の地形や歴史や港と時間オーバーの説明で、結果何を聞いたか、何が大切か判らないガイドだったと思います。神戸市内の大学で学んでおられるのですから、案内した場所を再度訪ね、当日のメモの中から少しでも私の説明を思い出しながら、これを契機に次のステップに進んでいただくことを望んでいます。また神戸同様、塗炭の苦しみから立ち上がっている被災地を歩き、復興したまちの様子から、それを成し遂げた市民の皆さんの活動にも焦点をあて、今日の行政側からの説明以上の「学び」を加えていって欲しいと考えています。

(講師) 仲田 文人

街歩きガイドとしては、まだまだ未熟な私の話を熱心に聞き、的を得た質問もしていただいて、こちらこそ感謝しています。感想文も興味深く読ませていただきました。あれもこれもと欲張ってお話ししましたが、時間の制約からバランスの取れた説明ができていなかったと反省しています。まずは災害の恐ろしさを伝承するのが大切との思いから、その部分を強調し過ぎる傾向があるかもしれません。復旧・復興やその後の取組みでしっかりと災害対策が行われていて、過去と同じレベルの災害であれば被害はかなり少なくなると想定されることも説明しておくべきだったと思います。ただし、東日本大震災を契機に、最悪の事態を想定して人命を守ることを最優先するのが国全体の方針となっています。災害を正しく恐れ適切な行動が取れるようになっていただきたいと思います。若い皆様が今後の我が国の防災レベルを益々高めていただけることを期待しております。

(講師) 田中 亜矢子

今回ガイド見習いで同行させていただきました。生まれる前の出来事だったり、神戸にゆかりがなかったりしたら、学びの立場とはいえ果たしてどのような受け止めをされるのかなと思いましたが、感想を読ませていただいて、感受性と想像力でそれぞれの我が事として考えを深められたことがうかがえました。わたしは今の皆さんの年頃のときに阪神・淡路大震災を経験し、若輩ながらもっとできることがあったのではないかと思っばかりですが、大事なのはまず事実を知り、怖さから逃げずに考えて備えることで、そのためには当時の「人の気持ち」を感じることで動機を強くするのではないかなと思います。全く同じ災害が起きることはありませんし、人生で1度も自然災害に遭わない人もいますが、生きていると危機はどこかにあるので、いろんな視点を備えていただくために、時々思い出してください。



Voice

「この研修で、学生は何を学び、何を感じたか？」
～災害・防災のリーダーになるために～

【学生スタッフ】今この場で南海トラフ地震が発生したと仮定し、初動から応急期、復旧期のフェーズにおいてどのような防災・減災の活動ができるかを考えました。災害が起きて被災したとなると、情報・人手不足、避難者（怪我人、高齢者（持病持ち）への配慮、コロナ禍対策等、たくさん問題が起きます。自分たちは若者の学生であり、学生ボランティアという立場において何を手伝うことができるか、何ができるかを実際に考えることで、いつ起きてもおかしくない災害を自分事として捉えることができました。

【参加学生】経験をしたかしていないかのギャップを埋めることが、災害の記憶を継承していく上では大事なのではないだろうか、と感じました。ただ、そうしたギャップが、果たして埋めることができるようなものなのかどうかは正直なところ分かりません。改めて、風化を防ぐことは難しいのだなど、災害の記憶・継承について考えさせられる研修会でした。



「研修を終えて～学生に伝えなかった事～」

（講師）ふたば学舎 コーディネーター 山住 勝利

今後の防災／減災を考えるには過去の災害時に人々がどのような対応をしたのかを知ることが欠かせません。あの時は何がうまくいき、何がダメだったのかということを知っていれば、自分自身が災害に遭った時にどうすればよいのか、ある程度想像して行動できます。そうした想像力を養うために、みなさんにはふたば学舎で避難所体験を受け、阪神・淡路大震災の時に避難所となった二葉小学校（現・ふたば学舎）について知り、今避難所運営に関わることになればどのような防災／減災活動ができるかを考えて的確な意見を出していただきました。

25年が経過し風化していく阪神・淡路大震災の記憶と教訓を一端でも伝えることができてありがたかったです。ぜひ災害時の避難所についての意見を改めてまとめてみてください。きっとあなた自身の防災／減災指針になると思います。



第5回研修会及びチームミーティング

日時：12月13日(日)14時00分～17時00分

場所：Zoomによるオンライン

内容：(1) 第5回研修会：14時00分～15時00分
テーマ：これまで研修を踏まえ、今後の活動に繋げるために

講師：神戸常盤大学 ボランティアコーディネーター 戸谷 富江

内容：第1回～4回の研修会の内容を踏まえ来年の本活動に向けどう取り組むべきかを考える。

(2) チームミーティング

内容：・現地関係者からヒアリングした内容についてミーティングを行い、12月20日のヒアリング報告会の資料をまとめる。

・ヒアリングした内容を踏まえ、来年2月～3月に実施予定の活動の内容について打ち合わせを行う。



Voice

「この研修で、学生は何を学び、何を感じたか？」
～これまでの学びをかたちにするには～

【参加学生】今後の活動に向けて自分の生きる目的について、この活動の目的について、向き合う相手は誰かについて考えた。目的は成し遂げようと目指す事柄、行為の目指すところ、意図している事柄で目標は目印、目的を達成するために設けたため、的であり目的と目標は違うということが分かった。自分の生きる目的と目標について考えると自分の生きる目的は、後悔しないようにいろんなことに挑戦し経験を増やすことだと考えた。そしてその目標のひとつとして、この災害ボランティアに参加することだと考えた。

【学生スタッフ】「ボランティアの本来の目的や向き合わないといけない相手って誰だろう？」ということ活動を忘れてしまうことはあると思う。実際に去年自分も活動していて「現地に行けた」という満足感があって本来の目的はそっちのけで活動をしていたかもしれないあとこの研修会を通して振り返ることができたと思う。今回の活動では自分たちの好奇心や気持ちも大切だが、それとは別に「向き合う相手」や一緒に活動してくれる学生や大人の方などのことも考えながら活動内容などを練っていきたいと感じた。

第6回ヒアリング報告会&チームミーティング

日時：12月20日(日) 14時00分～17時00分

場所：Zoomによるオンライン

内容：【第1部】ヒアリング報告会

現地関係者と行ったヒアリング内容を踏まえ、各活動地の現状や来年の本活動の方向性についてプレゼンテーションを行う。

【第2部】チームミーティング

1月10日に行う活動プレゼンテーションに向け、本活動の具体的な内容について打ち合わせを行う。

Voice

「この研修で、学生は何を学び、何を感じたか？」
～現地ヒアリングを行って・・・
これからどうする？～

【学生スタッフ】ヒアリング報告会では、各県の担当者から、住民の方々からのニーズ、自分たちがなにをどういった目的でしたいのか等、様々な意見を聞くことができました。自分たち宮城チームからは、尚絅学院大学 TASKI の学生と聞いた、長沼さんの講話について学んだことや分かったことを伝えました。後半のチームミーティングでは、最初に閉上の仮設住宅に送るクリスマスカードの写真を撮りました。Zoomでなかなか会えない中、どのようにして学生のことを伝えるか、どうやってメッセージを送るか考えた上での案だったので、実行できて良かったと思います。本活動についてはまだまだ検討中なので、これからもっと学生間で話し合いを重ね、

長沼さんにも相談をした上で、TASKIの学生と一緒に活動できたらと思います。

【参加学生】つながりをつくることはこんなにも難しいものなのかと改めて認識させられています。つながりと一口に言ってもその形は様々なだろうとは思いますが、それ故にどういう形がベストか分からず逡巡してしまいそうだと感じました。正解がない問いであるが故に、どこから妥協点を見出す必要があるのか、それともそれは妥協であるとして容認しがたいものなのか、という課題も感じました。時間的・人的資源が限られていることからやはり、どこから妥協する必要は出てくるように思います。それら妥協=ベストになるよう頑張るのみでしょうか。書いている自分でも何だかよく分からなくなってきました。恐らく考えすぎなんだと思います。もう少し気楽に考え、行動できるよう心がけたいと思います。

チーム名
アンバランス

大島かれん、奥川華
永茂こころ、前田輝一朗
松本温寛、美馬直



新たな街づくり

●桜町（花畑周辺地区）にぎわい創出
桜町地区再開発施設—2019年12月全館開業
用途

バスターミナル/商業施設「SAKURAMACHI Kumamoto」/公益施設
「熊本城ホール」/共同住宅/保育所/事務所/駐車場等



←桜町開発地区マップ



第7回現地活動プレゼンテーション

日時：1月10日(日) 14時00分～17時00分

場所：Zoomによるオンライン

内容：【第1部】現地活動プレゼンテーション

現地関係者と行ったヒアリング内容を踏まえ、2月から予定している本活動の方向性・内容についてプレゼンテーションを行う。

【第2部】チームミーティング

本活動について、打ち合わせや実施計画書、予算申請書を作成する。

本活動の方向性・内容

宮城チーム



長野チームの活動目的

～住民さんを笑顔にしたい～

そのために、自分や多くの人に長野の災害のことを知ってもらう必要がある！！



動画やSNSの活用

2020年度 学生災害ボランティア・ネットワーク事業

現地活動プレゼンテーション 岡山チーム

PowerPoint作成者：上野梨里香

宮城県名取市閑上での活動

茶話会での絵灯籠制作

日 時：2021年3月9日(火)10時00分～11時30分
場 所：Zoom (閑上中央町内会集会所)
人 数：閑上地区の住人の方13名、尚絅学院大学学生3名、
神戸学生6名

●趣旨・目的

- ・3.11 追悼式の絵灯籠を、閑上地区の住民の方々や宮城の学生と共作し、復興の願いを届ける。
- ・コロナ禍のため、現地に行き直接対面することができない中、Zoomを通して、住民の方々とオンライン上で繋がる。
- ・コロナ禍における、ボランティア活動の新たな在り方をみつめる。

●活動内容

コロナ禍で何ができるのか考えたとき、住民の方々とオンライン上で繋がることはできないか、というボランティア活動の新たな在り方を見つけるべく考えた活動です。神戸の学生と宮城の学生が現地の方からの提案や、自分たちで考えたテーマをもとに灯籠の絵を作成し、現地に郵送しました。閑上地区の住民の方々がそれらの絵を絵灯籠に組み立て、3者協働で制作された絵灯籠を、町内会の追悼行事に並べていただきました。自分の手元にあった絵が現地の方によって組み立てられる様子からは「繋がり」が見えたように感じました。今回の活動から離れていても繋がることができると感じました。また絵灯籠の共同制作は毎年続けることができるのではないかと思います。

活動で感じたこと、感想

神戸女子大学 3回生 三鍋 佑奈
実際に活動を行うまでに解決すべき課題はたくさんあり、当初は不安でいっぱいだった。しかし、現地の方々を含め、多くの方から助言をいただいたことで何とか活動を形作ることができた。対面交流ができなくなった悔しさや、現地のみなさんとつながりたいという想いを原動力に活動に取り組みめたように思う。

現地関係者からのコメント

名取市サポートセンター どんと・なとり統括 菊地 麻理子様
東日本大震災から10年。名取市ではハード面の整備がほぼ完了し、これからは安心して暮らせる地域コミュニティづくりの重要性が高まると考えられます。今年新型コロナウイルスの影響でZoomという新たな方法での交流となりましたが、おかげさまで住民さんたちにはたくさんの笑顔の花が咲きました。震災、そしてパンデミック。支援の形も時代背景によって変わってきますが、学生災害ボランティアのみなさんには、県を越え年代を越え、いつまでも変わらず心を寄せていただき、感謝しております。これからも忘れることなく、未来へつないでくれることを願っています。



東日本大震災特別講演会

「東日本大震災から10年 聴こう、話そう、考えよう
3.11～あの日から10年、私たちの思い～」

日 時：2021年3月28日(日)16時00分～17時30分
場 所：Zoom (全国各地の大学生)
講 師：閑上中央町内会会長 長沼 俊幸様
人 数：20名程度

●趣旨・目的

- ・10年の節目に3.11を振り返り、震災の経験を後世に伝えていく機会をつくる。
- ・被災者とその地域に今も暮らす方々と繋がることで、3.11について深く考え、社会に知ってもらう。
- ・他県の被災地をはじめとする全国各地の学生と交流し、意見交換の機会とする。

●活動内容

10年の節目に3.11を全国の学生と振り返り、率直な思いや考えを共有する機会をつくるのが目的です。各地方で東日本大震災や今の現地の様子のイメージは様々あると考えます。参加者と長沼さんの全体での交流では一人ひとり違う意見が飛び交い、それぞれが新たな知識を持つことのできる会になるのではないかと思います。また、交流を通し、参加者の思いを受け止めた中で被災時からの10年間について長沼さんに講話していただきます。講話前後の東日本大震災に対するイメージの変化、震災に対する考え方の変化を感じることができると思います。身近にあるのに知らないことを知る感覚を多くの方に感じていただくことができるように活動したいです。

活動で感じたこと、感想

頌栄短期大学 2回生 森本 彩乃

活動は3月末となりますが、東日本大地震のことについて多くの方と話し合いたい！地方の学生の意見を聞きたい！という長沼さんの思いから始まった企画です。全国規模で参加者を募集することができ、嬉しく思います。



東日本大震災から10年
聴こう、話そう、考えよう3.11
～あの日から10年、私たちの思い～
2021年3月28日(日)
16:00～17:30(予定)

東日本大震災発生から10年が経ちました。今、皆さんは東北(宮城)についてどう感じていますか？地域の人とはどう感じていますか？
宮城県、閑上中央町内会、尚絅学院大学、頌栄短期大学のみなさんと共に、率直な意見を交わし、一緒に考えましょう！

講師者：宮城県名取市
閑上中央町内会会長 長沼俊幸様
受講対象：全国の大学生
定員：50名(先着順)
開催方法：WEB会議システム
ZOOM(オンライン)
参加費：無料

【プログラム】
○第一部(話そう)
「3.11ってどんなイベント？」
- 講師の経験や思い、3.11について話そう！
○第二部(聴こう)
「宮城県名取市閑上10年」
- 閑上町内会会長、長沼さん
3.11の思い出や思いを話そう！
○第三部(考えよう)
「感じたことを共有しよう」
- 考えや思いを共有しよう！

【申し込み方法】
下のQRコードを読み取り、必要事項を入力の上、お申し込みください。



※お申し込みは3月28日(日)15時までにお願いします。

主催：大学コンソーシアムみやぎ神戸 学生災害ボランティアネットワーク事務局 宮城チーム (Lily Door)
お問い合わせ先：大学コンソーシアムみやぎ神戸事務局 078-274-0233



『仙台防災未来フォーラム2021』
オンライン発表部門に尚絅学院大学
(宮城県名取市)と共同で出展しました

長野県長野市赤沼での活動

届け！長野のりんごハッピー会～りんごの架け橋～

日時：2021年2月23日（火）14時00分～15時00分
場所：Zoom（長野のりんご農家のみなさん）
人数：長野の方9名、神戸の学生12名

●趣旨・目的

私たち学生は「住民さんを笑顔にする」を目標に、りんご農家の方々や長野県・市社協の方々と交流を行い、令和元年の台風による被害を大きく受けたことを知りました。その被害に負けず長沼地域の活性化を日々続けられていると聞き、そこから様々な人に長野の美味しいりんごや災害を知って頂きたいと考えました。その思いから『届け！長野のりんごハッピー会』を計画しました。

●活動内容

チーム目標を全員が意識して活動することができました。生食用のりんごが美味しいことはもちろん、KOBÉ BOLEROさんで作っていただいたりんごのお菓子も好評でした。コロナ禍で会えない中、Zoomを通したオンラインの活動を何度も行い、学生は自分の役割をきちんと行なったことにより、充実した活動が行うことができました。

活動で感じたこと、感想

神戸女子大学 3回生 中野 実菜

今年度は、コロナ禍により現地へ赴くことはできず、現地住民の方とオンラインでの活動がメインとなりました。初めはどうしたらいいか不安でしたが、何度も話し合いを行う中で少しずつやるべきことが決まっていきました。「届け！長野のりんごハッピー会～りんごの架け橋～」では、長野の方も私たちが笑顔いっぱいの活動が行うことができました。長野の方や長野のりんごを食べたことのない学生が、長野のりんごを使った神戸で作ったりんご菓子を美味しいと言ってくれ、とても嬉しかったです。実際に会うことはまだ難しいかもしれませんが、来年度もぜひ長野の方たちと活動が行えたいと思います。

頌栄短期大学 2回生 及川 志保

この活動を通して長野の災害のこと、その災害でのりんごの被害、りんごが元に戻るまでどのような経緯があったのかなどといったことを直接現地の方から聞くことが出来てとても貴重な経験ができました。そして農家の方々とも繋がることが出来たことから、りんごを通して今回の様な会を行うことが出来てとても楽しかったです。この私たちの活動に協力してくださった方々には感謝です。

現地関係者や現地学生のコメント

長野 津野復光隊 小川 奈津美様

長野のりんごが神戸に渡って、お菓子という形で長野に返ってきて、みんなで共有できたことに感動しています。お菓子もおいしかったです。長野は富士も主力ですが、8月から12月まで様々な種類のりんごがあるので、また長野に足を運んで頂ければ嬉しいです。今後もよろしくお願いします。

KOBÉ BOLERO お菓子楽団 店長 高石 祥太様

「長野のりんごで神戸スイーツを創作し、それを再び長野に送り、食べて笑顔になってもらう…」お店にとって初めての経験を従業員一同楽しませていただきました。学生主体の企画ということで、学生の皆さんが熱心にお店に通ってくれて、試作、試食を重ねた結果、無事に「りんごのパウンドケーキ」と「りんごのスマイルパイ」が完成した時は嬉しかったです

ね。このように全国の被災地に 想いを馳せ、繋がって、被災地を支援する活動は、学生時代だからできることだと思えます。ぜひ、これからも続けてください。最後に自分達が作ったお菓子を多くの方に一緒に食べていただく姿を観るのは、初めてで、とても感慨深かったです。来年度も、もし繋がれるのであれば、今度はまた違うお菓子も作ってみたいという気持ちにもなりました。貴重な経験をありがとうございました。また、機会があれば、ぜひよろしくお願いします！



岡山県小田郡矢掛町での活動

大学生とおしゃべりしませんか? ~ 2018年7月のこと ~

日 時：2021年3月16日(火) 11時30分~13時30分
 場 所：Zoom (岡山県立矢掛高校、同校OG)
 人 数：矢掛高校生9名、矢掛高校OG現大学生2名、
 神戸の大学生5名

●趣旨・目的

災害から2年以上が経ち、災害時に見落とされやすい大人でもない子供でもない当時の高校生に焦点を当てる。お話しを通して真備のみなさんはもちろん、たくさんの方に、彼らの思いを知ってもらおう。また持続可能な会にすることを目的とする。

●活動内容

ゲームや雑談タイムを設けて大学生と高校生の距離を縮め、その後、当時伝えられなかった、今だから話せるその時の災害についてお話しをする。その気持ちを文字に残すために真備の特産品から派生した「きもちの笹」を作る。

活動で感じたこと、感想

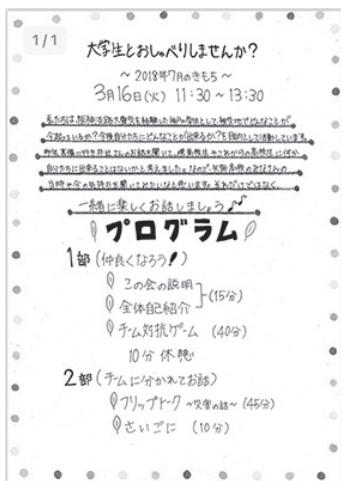
甲南女子大学 2回生 中川 真由

今回、オンラインで矢掛高校生と災害についてお話しをし、災害経験のある高校生から実際に話を聞くことで、新たに対策を練ったり、今後被災した際に気を付けるべきことを学ぶことができました。特に、二階にあるものを持たずに逃げたせいで大切なゲーム機が壊れてしまったということから、豪雨によって二階まで浸水することを学びました。そこでこれから豪雨で被災する際には周囲に「大切なものは持って逃げて」と指示できると思いました。この活動に参加して得たものは多く、それを実際に活かせるようにしたいです。

現地関係者や現地学生のコメント

矢掛高校卒業生 香川大学 西川 奈美穂様

西日本豪雨から約2年半、災害を忘れられていく中で、同世代の人に体験した災害を話す機会を設けて下さり本当に嬉しく思います。私自身、災害から時間が経ち、違う土地に住んでいるため災害の記憶が薄れてきています。災害の記憶を残すためにも伝えていくことは大切だとこの会を通して痛感しました。そして、同じ災害を経験した高校生の方から自分が今まで知らなかったことを知ることができ、まだまだ西日本豪雨の新しい発見があるため多くの人にもこの災害のことを伝えて共有していかないといけないなと思いました。矢掛高校卒業生として、招いて下さり一緒に活動できて良かったです。この同世代の災害の話を聞くという活動が続くものになってくれたら嬉しいです。



熊本県人吉市・兵庫県三木市での活動

私たちがお助けマンになる～子供たちと表札づくり～

日時：2021年3月25日(木)、26日(金)、29日(月)
場所：Zoom(熊本県人吉市の小学生、兵庫県三木市の小学生)
参加者：熊本県・兵庫県の小学生13名、熊本の学生2名、神戸の学生6名

●趣旨・目的

令和2年7月豪雨の被害の大きかった熊本県人吉市の仮設住宅に住む方々へお送りする表札を、兵庫の小学生と学生でつくることにより、仮設での暮らしに小さな彩りを添える。阪神淡路大震災など大きな災害を経験したことのない兵庫の小学生にも、人吉市の実情を知ってもらうことを通して、防災の大切さや自分たちに何ができるのかを考えてもらう。

●活動内容

3月25日(木)15時30分～16時00分
熊本とはどのようなところで、どのような災害が起こったのか、また仮設住宅の表札を作る意味についてお話ししました。遠く離れた熊本の学生とコミュニケーションを取ることが、コロナ禍で遠くに行けない小学生の気分を晴らすことになりました。

3月26日(金)15時30分～16時00分
人吉市生まれで7月豪雨の発災直後から現地で活動続ける熊本学園大学2年の山北さんから、被害状況や防災について直接お話ししてもらいました。

3月29日(月)10時00分～12時00分
前回と前々回のお話を受けて、小学生たちが思い思いに表札をつくりました。

活動で感じたこと、感想

甲南大学 2回生 松木 温寛
活動に活かすため西間上町第一仮設住宅に住む方にお話を伺いました。実際に豪雨に直面した時の行動、泳いで外に出た話、流されかけた話などが非常に印象に残りました。

神戸松蔭女子学院大学 2回生 奥川 華
映像や文章では分からない住民さんの当時の想いを知ることができ「住民さんのために私たちができることは一体何があるのか。」と私たちの活動する意味を、もう一度考えさせられる貴重な時間だったと思います。

現地関係者や現地学生のコメント

熊本大学 D-SEVEN 代表 諏訪原 夏海様
この活動に参加したことで、繋がりのなかった熊本学園大学のボランティアサークルさんと一緒に人吉で活動でき、D-SEVENとしての活動にも変化がありました。本当によい契機になりました。ありがとうございました！

熊本学園大学 社福災害学生ボランティアグループ代表 山北 翔大様
新型コロナウイルスが懸念される中で発生した令和2年7月豪雨。二重の災害でした。そんな中、神戸コンソとの活動を頂きリモート支援の在り方を確立することができました。私も進行形で活動しながら、神戸の皆さんも先行事例がない中、模索し企画して下さるなどたくさんの壁がありましたが、充実した時間を過ごすことができました。今回で終わりではなく、皆さんと人吉で会える日が来ることを願うばかりです。

人吉市内仮設住宅内集会所での「つながるカフェ」への参加

日時：2021年2月23日(火)、3月2日(火)、16日(火)、11時30分～
場所：Zoom(オンライン) 西間上第二仮設団地、梢山仮設団地、人吉城跡仮設団地の集会所

●活動内容

熊本学園大学、社福学生ボランティアグループが関わる人吉市内の仮設住宅集会所のつながるカフェとオンラインで繋ぎ、仮設住宅で生活を送る方々の話を聞き「自分たちが何をすべきか」といったニーズの把握を行いました。また実際に避難されている方から話を聞き熊本の現状を神戸の学生が知る機会になりました。

活動で感じたこと、感想

神戸常盤大学 1回生 大島 かれん
実際に経験した事による災害に直面した時にする行動や、今まで大丈夫だったから大丈夫だろうとか、役所と戦うなどの話には現実感があり、実際に声で聴ける体験談が凄く印象に残った。みなし仮設住宅に住んでおられる女性の方の話では泳いで家屋から外に出た話や流されかけたお話など順番に出来事を話していただけた。お2人から同じ出来事のそれぞれの異なる体験を伺えたのがとてもよかった。

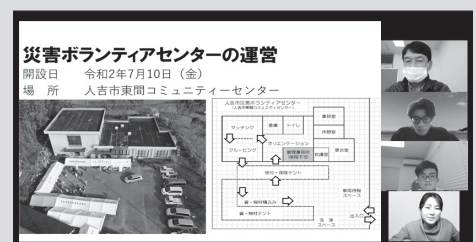


熊本豪雨災害学習会

日時：2021年3月3日(水)
16時00分から17時00分
場所：Zoom(オンライン)
講師：人吉市社会福祉協議会 事務局 長 松岡 誠也様
内容：熊本豪雨災害の現場の最前線で活動された方から熊本豪雨災害の現状と課題(社協の役割も含め)について学び、今後の活動につなげる。

活動で感じたこと、感想

神戸大学 2回生 前田 暉一朗
学習会で印象に残ったことを2点あげたい。1点目は社会福祉協議会の活動と役割が非常に広範であり、災害時の復旧作業や仮設住宅への支援のような短いスパンでの活動だけでなく、災害後のコミュニティづくりといった長期スパンの支援も行っていること。2点目はコロナ禍の災害という新たな状況の中で、ボランティアセンターにおけるバスマッチングを行うなど柔軟に対応し、コロナ禍においても工夫次第で様々なことができると考え直すことができたこと。



大学コンソーシアムひょうご神戸、災害ボランティア活動、10年の歩み

私たち、大学コンソーシアムひょうご神戸、学生交流委員会では、東日本大震災の発災から10年間被災地でのボランティア活動を続けてきました。

これまで、神戸市社会福祉協議会、ひょうごボランタリープラザ、日本財団学生ボランティアセンターと共催し、宮城県、岡山県、熊本県、長野県の現地の大学や社会福祉協議会をはじめとした関係者と連携し、仮設住宅や復興公営住宅で、傾聴を中心とした災害ボランティア活動を展開してきました。この10年間で450名を超える学生がこの活動に参加し、様々な経験を積み、巣立ち、社会人として現在活躍しています。

10年目の2020年度は、「コロナ禍でのボランティアを考える」を活動テーマに掲げ、オンラインを用いた新たなボランティアを模索しながらも取り組み、一定の成果をあげることができました。

この活動の当初からのコンセプトである「つたえる・つながる・つづける」の「3つの“つ”」を踏まえ、今後も現地の方々との連携を大切に、被災地とのネットワーク活動を継続し、現地の皆様に喜んでいただくとともに、学生に学び・経験の場を提供できるようプログラムの充実化に取り組んで参ります。

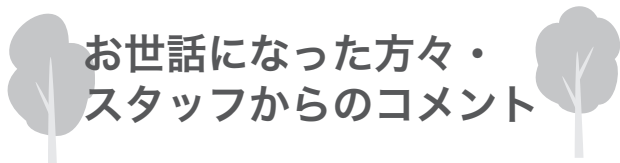
2021年3月
大学コンソーシアムひょうご神戸 学生交流委員会
学生災害ボランティア・ネットワーク事業
スタッフ一同

○過去の事業報告書の表紙（2013年から2020年の8年分）



○過去の学ボラの表紙（2017年から2020年の4年分）





お世話になった方々・ スタッフからのコメント

尚絅学院大学 連携交流課

佐々木 未央

コロナ禍において新しい取り組みの連続でしたが、皆さまと一緒に悩み、例年よりも回数を重ねて協働して取り組んできたことで多くの発見がありました。震災から10年経っても、今後何年経っても想いは変わらない。それは、兵庫県の皆さまが教えてくれました。ありがとうございました。

神戸市社会福祉協議会 地域支援部 広報交流課 課長

藤崎 圭多朗

コロナ下での支援という誰もが未経験の状況の中、懸命に取り組まれたみなさんに敬意を表します。思うような結果に至れたかはそれぞれ違うとしても、今回はなによりも困難な課題に挑んだことに意義があると思っています。この経験を胸に、これからも課題に挑み続ける人であってください。

神戸市社会福祉協議会 地域支援部 広報交流課 主事

高石 憲志郎

社会福祉協議会はボランティア活動を推進する立場ですが、私も『コロナ禍でのボランティア活動』について、この間学生のみなさんと一緒に悩み考える、大切な時間になりました。現地の方々の「ありがとう！」を一緒に見させてくれて、本当にありがとう！

日本財団学生ボランティアセンター(Gakuvo)

宮腰 義仁

苦しい立場にある方の文脈を含めて想像するちからを鍛え、状況を変革していくちからを身に付けること、わたし自身のテーマでもあり、本事業に関わったすべての方々が意識せざるを得ないことでしょう。いっしょによい未来をつくりましょう。

神戸女子大学 文学部 教授

大西 雅裕

コロナ禍での活動は？オンライン？それとも中止！V活動は対面で行ってこそ、利用者さんと共有できる。果たしてうまくいくだろうか「？」ばかりであったが、「とにかくやろう」。「一歩前に」これこそがV活動と確信できた一年でした。!(^^)!(^_^)- ☆

神戸常盤大学 ボランティアセンター長

保健科学部 講師

永島 聡

長野チームが地元のリンゴ生産者の方々との間に貴重な関係を築くことができたのは、地元の皆様が神戸の学生たちとの繋がりを希求してくださったからであると思います。よってこの活動は、一定の継続性を持たせる必要があるとも思います。

甲南大学 共通教育センター 教授

久保 はるか

本年は、コロナ禍という新しい課題が突き付けられる中で、どのようなボランティアができるのか、模索と挑戦の年となりました。思うように行かない時もあったかもしれませんが、皆さんの取り組みは、オンライン・ボランティアという新しい形を示す大きな意義がありました。今回の学びを大事にしてくださいね。

兵庫県立大学大学院 減災復興政策研究科 教授

青田 良介

「ボランティアは何でもありや」という言葉をご存知でしょうか。コロナ禍の下、苦労した甲斐あって、ユニークなプログラムが生まれました。前例に囚われず道を切り拓くのが創作的復興でもあります。防災に限らず、今後もこの気持ちで逆境を乗り越って下さい。

神戸常盤大学 ボランティアコーディネーター

戸谷 富江

「誰かのために 何かをしたい」、初めはぼんやりとした曖昧な思いだったかもしれません。この事業に参加する中で、誰のために何をすべきかを仲間とともに追い求め、自分たちの今持つすべての力を投じて取り組んだ果てには、本当に今自分のすべきことが見えてきたのではないかと思います。

関西学院大学 研究推進社会連携機構
社会連携センター

山崎 亮太郎

私自身「オンラインでなにができるの？」という疑問からはじまった今回のボランティア活動ですが、回を重ねるごとにオンラインでも現地の方々と学生が自然に「会話」ができるようになり、コロナ禍でもできることがたくさんあることに気づきました。「会話」が現地の方々の笑顔を生んだ！素晴らしいボランティア活動でした。

甲南大学 地域連携センター事務局 課長
松下 賢一

今年度は「コロナ禍での災害ボランティアについて考える」をテーマに、11月から活動を開始しました。宮城、岡山、熊本、長野の現地関係者の方々とオンラインを活用して打ち合わせを行い、活動を実施しましたが、そのプロセスでオンラインの良さ、難しさの両方を経験することができたと思います。今後も「制約がある中で自分には何ができるのか」を考えながらも、行動に移して欲しいと思います。今回の経験があれば、自信を持って、次の活動に進めるはずです。

大学コンソーシアムひょうご神戸 事務局
鈴木 真紀子

「誰かのために何かをしたい」というみなさんの想いを大事に、そして「みなさんの想いを受け止めてくれる誰かの想い」を想像することを忘れずに…あとは、なんでもチャレンジ！これからもみなさんの心の中にある温かいものを育ててください。ありがとう。

OGからの「伝える 繋がる 続ける」

2017、2018年度参加神戸親和女子大学 OG
小畑保奈美

「コロナ禍でオンラインボランティアという新しいボランティア活動スタイルを切り開いた学生のみなさんへ…」

震災から10年の節目の年は、世界中が「天災」に見舞われ、誰にとっても我慢の年となりました。今年度のみなさんの活動は、「コロナ禍だからこそできた活動」が多かったと思います。

活動内容の計画・立案に全振りするのではなく震災の話聞くことが中心であったり、ボランティアとは、今自分にできることは何か等、本質に立ち返って考えたりする機会が多かったのではと感じました。そして、みなさんの感想や報告を聞いていて、自分の現状と照らし合わせたり、話を聞き、自分が何を学んだかななどを深く落とし込んで考えているなあと切に感じました。

私が大学の時に活動していた頃は、現地の方が喜んでくれるためにはどうしたら良いか、神戸の学生の意識を高めるために自分は何ができるのか、を中心に考えていました。なので、皆さんのように「被災地ボランティアとはどうあるべきか」という、本質に迫るところを深く考える機会が少なかったなあと、思いました。

但し、そのかわり、今年度の活動は、ほとんどのミーティングがZoomを通してだったり、活動もオンライン上だったので、みなさん自身の士気が上がらなかったり、集団としての連帯感を深めづらかったり、というような問題が出てきたのかなと思います。

「コロナ禍だからこそできたこと」

「コロナ禍でなかったらできたこと」

に着目し、二つが同時にできるボランティアのあり方や、研修の持ち方などについて、自分自身で、仲間同士で考えられる良い機会になったのではないかなと思いました。

活動に携わる人達皆が笑顔になれるようなボランティア活動ができるよう、在学中に経験して思ったことや、OGとしての目線から感じたことを伝え続け、これからもボランティア事業に携わり続けていきたいと思っています。

学生スタッフ

comment

リーダー

田淵日和

神戸松蔭女子学院大学
4 回生



私は、この活動に参加し、自分自身の成長を感じています。特に、苦手なことでも一歩踏み出す勇気は、諦めずにとくさんのことに挑戦するきっかけとなりました。報告書を読んでもくれた学生の皆さん、大学生生活で何かしたい、成長したいと思っていたら、ぜひ、この活動に参加してください。一年後、成長した自分と出会うことができると思います。かけがえのない経験をさせていただき、ありがとうございます。これまで支えてくださった多くの方々に、この場をお借りしてお礼申し上げます

副リーダー

中村華菜

神戸常盤大学
3 回生



この活動を通して私は協力することの大切さを知りました。今年はコロナウイルスの影響で現地には行けなため、これまでの活動を参考に出来ず、1 からのスタートでした。そのため、どのような形で長野の災害そして、長野の美味しいりんごをより多くの人に知ってもらえることができるか、活動内容を考えることが大変でした。しかしグループのみんなや長野の方々そして神戸のスタッフと意見を出し合った結果、素晴らしい活動ができました。この経験をこれからの社会活動で活かしていきたいです。ありがとうございます。

中野実菜

神戸女子大学
3 回生



私自身、今年 3 年目の活動でしたが、「初めての長野」「初めてのオンラインでの活動」など、たくさんの「初めての壁」があり、最初はとても不安でした。しかし、チームの学生やスタッフと一緒に、「初めて」を開拓する楽しさとそれに伴う新たな発見や学びは、かけがえのないものとなりました。私たちの活動を支え、あたたかく見守ってくださった現地の方には本当に感謝しています。ありがとうございます。

三鍋佑奈

神戸女子大学
3 回生



今回のコロナ禍でのボランティア活動は、この状況下のため例年のような活動ができなかったり、制限があったりと、悩まされることや苦労が多くありました。それでも、対面できない中チームや現地ともオンラインで話し合い、この状況下をプラスに捉え、できることを考えようと奮闘できたように感じます。二月には福島・宮城で思いがけない地震もあり、予定していた活動ができなかったこともありましたが、予測できない地震の怖さや、現地や住民の方々が感じる思いを、もう一度考えるきっかけになったのだと思いました。この事業に参加される学生の皆さんには、これからも現地の思いを最優先に、自分たちができることを考え、伝え続けて欲しいと思います。

美馬直

甲南大学
3 回生



今回の活動は、「コロナだから出来ない。」と、言い訳したくなる場面が何度もあった。各学校の感染対策で、チームとしても思い通りに動くことが出来なかった。しかし私達アンバランスは打倒コロナを掲げ、実行すべく戦略を考え抜いた。ポイントは3つ。①7～96 才の幅広い年代の方とのつながり②本活動対象者が私達大学生でなく、神戸と熊本の小学生であること③表札として支援の形を残すこと。住民さんのニーズに合った最高の支援が出来た。ご尽力頂いた皆さまに感謝申し上げます。

茶谷まりん

神戸女子大学
2 回生



昨年真備給仮設住宅に訪問させていただき、真備のみなさんのことが忘れられなくて今年もこのボランティアに参加することにしました。コロナの影響のみなさんと直接会うことは叶いませんでしたが、オンラインで繋がることができうれいといっぱいです。これもひとえに矢掛高校のみなさん、倉敷市社協のみなさんの温かさのおかげです。ありがとうございます。

松木温寛

甲南大学
2 回生



昨年度からこの活動に携わっていましたが、例年と違いコロナウイルスの影響で活動に制限があるなか企画運営をしていくことに苦戦しました。しかしオンラインを有効活用しながらチーム一丸となり現地の方や子供たちと交流することができ安心しました。今後ボランティアの幅がより広がるのではないかといたった学びがあったことも今年度の活動だからこそ収穫だったと思います。今年度の活動に参加できてよかったです。

森本彩乃

頌栄短期大学
2 回生



今年度は新型コロナウイルスの影響により現地に足を運ぶこともできず、研修会も遠隔で行うことが多くありました。初め、遠隔でのコミュニケーションは難しいこともありましたが、徐々にコミュニケーションが増えていきました。また、研修や活動を通して直接会うことができない際に考えることや必要なことなどを学びました。新型コロナウイルスが落ち着き、様々なところに行けるようになれば関わってくださった方々のところへ足を運びたいと思います。活動に当たり支えてくださったスタッフの皆様、ありがとうございます。

神戸市社会福祉協議会・日本財団学生ボランティアセンター 大学コンソーシアムひょうご神戸共催

2020年度

学生災害ボランティア・ネットワーク事業 学生チーム

宮城

宮城県名取市閑上での活動チーム

氏名	学校名	学年
小谷 泰誠	神戸市外国語大学	3
三鍋 佑奈	神戸女子大学	3
森本 彩乃	頌栄短期大学	2
武本 奈都未	姫路大学	1
森下 恵理子	神戸松蔭女子学院大学	1
大島 空	明石工業高等専門学校	2

岡山

岡山県小田郡矢掛町での活動チーム

氏名	学校名	学年
田淵 日和	神戸松陰女子学院大学	4
上野 梨里香	神戸松蔭女子学院大学	2
茶谷 まりん	神戸女子大学	2
中川 真由	甲南女子大学	2
廣瀬 未沙	神戸女子大学	1

長野

長野県長野市赤沼での活動チーム

氏名	学校名	学年
中野 実菜	神戸女子大学	3
中村 華菜	神戸常盤大学	3
猪嶋 晴佳	頌栄短期大学	2
及川 志保	頌栄短期大学	2
山本 弥央	神戸常盤大学	1

熊本

熊本県人吉市・兵庫県三木市での活動チーム

氏名	学校名	学年
美馬 直	甲南大学	3
奥川 華	神戸松蔭女子学院大学	2
永茂 ころこ	頌栄短期大学	2
前田 暉一朗	神戸大学	2
松木 温寛	甲南大学	2
大島 かれん	神戸常盤大学	1

※は学生のスタッフです

参加学生 計 22 名

共催団体スタッフ一覧

●神戸市社会福祉協議会

地域支援部長 禰宜田 竜樹
広報交流課長 藤崎 圭多朗
主事 高石 憲志郎

●日本財団学生ボランティアセンター

常務理事 澤田 佳彦
宮腰 義仁

●大学コンソーシアムひょうご神戸 学生交流委員会

・委員長校 神戸親和女子大学 地域連携センター長 教授 大島 剛(委員長代理)
・副委員長校 甲南大学 共通教育センター 教授 久保 はるか
地域連携センター事務室 課長 松下 賢一

・ボランティアユニット校

神戸女子大学 文学部 教授 大西 雅裕(学生交流委員)
神戸常盤大学 ボランティアセンター長 講師 永島 聡(学生交流委員)
神戸常盤大学 ボランティアコーディネーター 戸谷 富江
兵庫県立大学大学院 減災復興政策研究科 教授 青田 良介
関西学院大学 研究推進社会連携機構 社会連携センター 山崎 亮太郎

大学コンソーシアムひょうご神戸事務局 鈴木 真紀子

計 14 名

2020 年度
学生災害ボランティア・ネットワーク事業
報告書

VOLUNTEER
REPORT 2020 2021
NOV ▶ MAR

発行日：2021年3月
神戸市社会福祉協議会・日本財団学生ボランティアセンター
大学コンソーシアムひょうご神戸
印刷：イワサキ出版印刷有限公司